



医療・介護、教育、原発問題などで国に要望



政府交渉で、要望書を手渡す 5人の県議予定候補

命を守る政治へ 県の責任重大

「医療・介護・国保」

県が司令塔で医療費抑制

安倍政権は、「医療・介護総合法案」で、高齢化のピークを迎える2025年に必要病床の2割以上を削減する計画であり、介護については、要支援を保険から外すなどサービスの大幅切り捨てをねらっています。国保については、市町村から県に保険主体を広域化し、保険料を安くするための繰り入れを認めないなど、ますます国保の負担を重くする中身です。

こうした施策は、実態にあつておらず、医療や介護が受けられない人を大幅に増やすことにつながる。医療や介護の現場の声を伝えました。高齢者の国保料が払えず、保険証の取り上げが全国一の福岡県で、さらなる負担増は許されないと政府に迫りました。

国は、国保広域化の目的が、医療の責任主体と保険主体を一致させる中で「医療費の抑制をはかる」ことだと説明。県が司令塔になって、医療・介護のサービスを削り、保険についても厳しい運用を考えていることがはっきりしました。地方と現場の声を聞き、命を奪うことにつながる医療改善は行わないよう強く求めました。

少人数学級と高校無償化

ゆきこじいた教育のための少人数学級については、文科省としても「7か年戦略」として進めているが、財政当局から厳しい査定が出されていること、今後とも予算確保に努めることの答弁。非正規雇用についても、正規を増やすよう促していくと答えました。

高校授業料無償化がなくなったことで、課税証明提出など新たな負担が生じており、国際公約「高等教育の無償化」に反する点厳しく追及。奨学金の返還に



第30回 震災救援バザー

とき 6月17日(火)

14:00 ~ 15:00

ところ 徳力団地集会所



5月のバザーの収益は、20051円でした。ご協力ありがとうございました。5月23・24日に福岡県の視察に行き、飯館村の仮設住宅を訪ねました。こちらから送った九州の野菜を届け、大変喜んでいただきました。(裏面参照) 6月は、上記日程で取り組みます。



実情を伝え、政府の見解を聞いた たかせ県議予定候補

についても、大学卒業時に数百万円の借金となり、若者の生活をおびやかしている実態をあげて、改善を要求しました。

「新たな安全神話」ふりまく

原子力規制庁

原発過酷事故に対する防災対策について、原子力規制庁は、具体的な質問には答えず、「新しい基準はこれまでより厳しいものだから、福岡のようにならない」「300キロ圏内は1週間以内に移動すればよい」など、到底納得できない説明を繰り返しました。福島並みを想定して防災計画をつくることになっていたことも反します。再稼働に前のめりになっている政府の姿勢があらがままでした。

つれづれに

◆「百聞は一見に如かず」フクシマの悲劇は、一瞬にして目に飛び込んできた。時間が止まった帰還困難区域、浪江町。船や車が田んぼのなかにひっくり返ったまま。ガードレールは、トイレレットペーパーをくしゃくしゃにしたように放り出されていた。

◆福島第一原発が見える請戸(うけご)小学校は海のそばの学校。一階部分は津波で流され、2階の教室の時計は3時40分を指していた。津波が襲った時刻だ。この学校では、地震のあとすぐに、教師と子どもたちは山を越えて2キロ内陸まで逃げたという。全員無事だった。危機一髪の奇跡的な出来事だった。

◆「くじけるな。つらいですね。しっかりと前を向いて生きていくのですよ。」先生がのちに書いたのだろう、黒板の文字に涙があふれた。つらいつらい現実の中で、大人も子どもも懸命に生きている。私たちががんばらなければ。

特集

フクシマの現実～浪江・南相馬・飯館～



5人の県議予定候補は、5月23・24日、福島県の現実を見ようと、帰還困難区域を含む浪江町、南相馬町、飯館村を訪ねました。福島第一原発が見える浪江町は、津波が襲った3年前に時が止まった様相でした。見ているだけで、言葉もなく、涙が出てきます。居住制限区域では、除染が各地で進み、仮置き場がつくられています。しかし、町全体、山や田畑を含む除染は、数年でできるものではありません。事故当初、国からの情報がなく、その後は、距離によって、放射線量によって分断され、十分な賠償もないまま不安な生活を余儀なくされている実態がよくわかりました。原発とは共存できないと実家します。



船や車が3年前と同じ状態で田畑の中。3月11日の新聞が積まれたままの販売店



↑浪江町と南相馬の境界。どちらも住めない地域ですが、浪江町は、帰還困難区域なので、許可なしでは入れませ



浪江町の請戸小学校。卒業式の準備がされたままの体育館。床がおおちています。時計は、津波が来た3時40分。



↑人がいない町で、除染作業だけが行われています。→南相馬の津波で流された地域。電柱の2倍の高さの津波が襲いました。



飯館村のみなさんが住む仮設住宅。小倉から送った野菜を届けました。農家の方ばかりで、「野菜を買って生活するとは思っていなかった。助かります」と喜ばれました。「帰りたいだけ」と涙ぐむ方もありました。4世代で暮らしていた皆さんには、本当に苛酷な仮設暮らしです。



原発から50キロも離れている飯館村で、放射線量を測定すると、今も0.4マイクロシーベルトと、空間も高い数値です。側溝ではかると、30マイクロシーベルトを超えて、針は振り切っていました。



飯館村の仮置き場。のどかな田園風景が広がる村は、田植えもされないままの田んぼにシートが敷かれ、仮置き場となっています。